

後期中観派とダルマキールティ (2)

—「空」を巡る論争：Lakṣaṇasūnyatā と Svabhāvānupalabdhi—

森 山 清 徹

目 次

略 号

序

I. 無自性論証と直接知覚 (pratyakṣa)

——Māl 前主張解説——

II. 無自性論証とヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa)

——Māl 後主張解説——

1. ヨーギンの直接知覚

2. ヨーギンの直接知覚と凡夫の知

結 論

III. 資料——Māl 解説——

略 号

拙稿 [1] ;

Kamalaśīla の唯識思想と修道論——唯識説の観察と超越——
(佛教大学人文学論集第19号, 1985. Dec.) pp. 43-77.

[2] ;

後期中観派の学系とダルマキールティの因果論——Catus-
kotyutpādapratiṣedhahetu——(佛教大学研究紀要通巻第73
号, 1989. Mar.) pp. 1-47.

AAPV ;

Haribhadra, *Abhisamayālaṅkāraḥ Prajñāpāramitā-
vyākhyā*, ed. by U. Wogihara. 1973.

BBh ;

Bodhisattvabhūmi, ed. U. Wogihara. 1971.

BhKI ;

Kamalaśīla, *Bhāvanākrama*, Minor Buddhist Text Part
I & II, ed. by G. Tucci 1978. Rinsen Book Company,
Kyoto.

D ;

the sDe dge edition, preserved at the Faculty of Letters,
University of Tokyo.

HB ;

E, Steinkellner, Dharmakīrti's *Hetubinduḥ*, Teil I, Tibe-

- tischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text, Wien 1967.
- Ichigō ; M. ICHIGŌ, *MADHYAMAKĀLĀMĪKĀRA*. 1985.
- LAS ; *Lañkāvatāra Sūtra*, ed. by Bunyiu Nanjio, Kyoto. 1956.
- MAK ; Śāntarakṣita, *Madhyamakālaṃkāra-kārikā*, cf. Ichigō.
- Māl ; Kamalaśīla, *Madhyamakāloka* (P. No. 5284. Vol. 101. Sa 143b²-275a⁴, D. No. 3887. DBU MA, Vol. 12. Sa 133b⁴-244a⁷)
- MAP ; Kamalaśīla, *Madhyamakālaṃkāra-pañjikā*, cf. Ichigō.
- MAT ; Candrakīrti, *Madhyamakāvatāra*, publiée, par Louis de la Vallée poussin, Bibliotheca Buddhica. IX. MEICHO-FUKYŪ-KAI, 1977.
- MAV ; Śāntarakṣita, *Madhyamakālaṃkāra-vṛtti*, cf. Ichigō.
- MMK ; Nāgārjuna, *Malamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras)* avec la *Prasannapadā* Commentaire de Candrakīrti, publiée par Louis de la Vallée Poussin, Bibliotheca Buddhica IV, MEICHO-FUKYŪ-KAI, 1977.
- NB(Ṭ) ; Dharmakīrti, *Nyāyabindu*. Dharmottara, *Nyāyabindu-Ṭīkā*, Bibliotheca Buddhica VII, MEICHO-FUKYŪ-KAI, 1977.
- P ; the Pekin edition, The Tibetan Tripiṭaka, ed by Daisetz Suzuki, Tokyo-Kyoto 1954-1963.
- PV ; Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika*.
- PV-sv ; *Pramāṇavārttikam* of Dharmakīrti, the First chapter with the autocommentary, ed. by Raniero Gnoli, Serie Oriental Roma, XXIII, 1960.
- PVṬ(Ś) ; Śākyabuddhi, *Pramāṇavārttikaṭīkā*, D. No. 4220.
- SDK ; Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga-kārikā*, D. No. 3881.
- SDP ; Śāntarakṣita, *Satyadvayavibhaṅga-pañjikā*, D. No. 3883.
- SDV ; Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga-vṛtti*, D. No. 3882.
- Tāl ; Kamalaśīla, *Tattvāloka*, D. No. 3888.
- 戸崎 (上) (下) ; 戸崎宏正, 『仏教認識論の研究』上巻 (1979), 下巻 (1985).
- TS, TSP ; *Tattvasaṅgraha* of Śāntarakṣita, *-pañjikā* of Kamalaśīla. ed. by S. D. Shastri.

VV; *Vigrahavyāvartanī* of Nāgārjuna, ed. by E. H. Johnston and Arnold Kunst, *Mélanges chinois et bouddhiques*, 1951.

序

一切法無自性を標榜する中観派にとり、最終的に問題となるのは、その一切法無自性が、どういう方法で証明され得るかということである。他学派の理論の論難を通じ、その不整合性を指摘して行くことは、中観派の見解の整合性を示す上で、不可欠な事柄ではあるが、しかし、その方法は、直接的に自己の見解を立証しようとするものではなく、間接的なものに過ぎないと言い得る。この問題は、Nāgārjuna 以来、中観派にとって最重要課題であった。すなわち、Nāgārjuna の *Vigrahavyāvartanī* (VV.)『廻靜論』の第5、6偈では、対論者の詰問として、〈中観派にとり、知覚 (pratyakṣa) や推理 (anumāna) も、空である故、中観派には、空 (śūnya) を証明する方法 (pramāṇa) すら存在しない〉との難点が指摘されている。この場合の論難者は、先学の御研究で、Nyāya 学派が考えられている。これと同様な状況が Kamalaśīla の *Madhyamakāloka* (Māl) 前主張に見出される。そこで対論者は、〈一切法無自性の証明は、聖教 (Āgama) によっても不可能である⁽¹⁾〉との詰問に続いて、〈論理 (Yukti) によっても、それは不可能である⁽²⁾〉つまり、直接知覚 (prat-

- (1) pratyakṣeṇa hi tāvad yady upalabhya vinivartayasi bhāvān /
tan nāsti pratyakṣaṁ bhāvā yenopalabhyante // 5 //

なぜなら、まず、仮に汝が諸存在を知覚によって認識してから、〔空である〕と退けるとしても、〔汝には〕諸存在を認識する知覚というものが存在しない。

anumānaṁ pratyuktaṁ pratyakṣeṇāgamopamāne ca /
anumānāgasādhya yē'rthā dṛṣṭāntasādhyaś ca // 6 //

推理、聖言、類推、また推理や聖言によって証明されるものや、実例によって証明される諸対象は、知覚によって先に示されている。

梶山雄一・瓜生津隆真『大乘仏典14龍樹論集』pp. 140-141.

- (2) 山口益、山口益仏教学文集(下)、『廻靜論について』p. 104⁻¹². 梶山雄一、前掲書 p. 378. 注(1)(5)、解説 p. 423.
(3) Māl での聖教 (Āgama) に関する論議の対論者は、主には唯識派である。他方、論理 (Nyāya) に関する場合は、本稿でも論じるように Dharmakīrti である。Cf. 拙稿 [1], [2].

yakṣa) によっても、推理 (anumāna) によっても、一切法無自性は証明され得ない、と中観派に対して論難している。

Nāgārjuna は、先の VV. K°5, 6 の詰問に対し、K°30 で、く私は、何らの対象をも認識せず、主張したり、否定したりすることもない故、その批難は当を得ない」との主旨で答弁している。また、Kamalaśīla は Māl⁽⁴⁾ で、この Nāgārjuna の答論 K°30 を、K°23 と共に引用し、自派の見解を補強するに活用している。したがって、Nāgārjuna も、Kamalaśīla も、共に、プラマーナによる一切法無自性、空の論証は可能であるか、否かについての検証と解答を迫られていた。しかしながら、仏教論理学、認識論の巨匠 Dharmakīrti を輩出した後の Kamalaśīla には、Nāgārjuna と同、異なった思想史上の背景があった。つまり Kamalaśīla は、直接知覚 (pratyakṣa) と推理 (anumāna) を確実な検証方法 (pramāṇa) として採用し、それ等に基づいて、無自性論証、二諦説の確立を Māl で行っている。その意味で、Dharmakīrti の理論を踏襲している。これは Kamalaśīla 一人そうであるというのではなく、Jñānagarbha, Śāntarakṣita から Haribhadra に至る後期中観派の学系と言って良い。しかし、それに止まらず、彼らは、一方で、実世俗 (tathyaśāmvṛti) を設定する基準として Dharmakīrti の因果効力 (arthakriyāśamartha) を軸とする直接知覚論に負いつつ、他方、勝義としての立場からは、その Dharmakīrti の因果論を論破しようとする、これが、彼らにとっての無自性論証なのである。こういった背景がある以上、一切法無自性は、プラマーナによって立証されなければならない状況下にあった。したがって、Kamalaśīla は、その詰問に対し、プラマーナに基づいて無自性論証を遂行している。言わば、破邪と顕

(4) Māl [P186b⁹-187a¹, D171a⁶-7] = VV, K°30.

yadi kimcid upalabheyaṁ pravartayeyaṁ nivartayeyaṁ vā /
pratyakṣādibhir arthais tadabhāvān me' nupālambhaḥ // 30 //

もし、私が何らかのものを、知覚等によって、認識するなら、私は、肯定あるいは否定をしようが、私には、そういったことはないのであるから、非難されることもない。

Māl [P187a¹, D171b²] = VV, K°23.

nirmītakā nirmītakāṁ mātāpuruṣaḥ svamāyayā sṛṣṭam /
pratiśedhayeta yadvat pratiśedho' yaṁ tathāiva syāt // 23 //

作り出されたものが、別の作り出されたものを退け、幻としてある人が、自らの幻によって、作り出したものを退けよう。それと全く同様に、この否定もあろう。

正にバランスをもたせ、自らが Dharmakīrti の直接知覚論、論理学を駆使し、時に逆手に取って、Dharmakīrti からの詰問に答える形で立論している。本稿では、そのうち、〈直接知覚 (pratyakṣa) による無自性論証〉に焦点を置き、Kamalaśīla が、Śāntarakṣita の影響のもと、一切法無自性をどう立論しているかを把握せんとする。

具体的検証として、まず、I. では、「空」を巡る論争の対論者が、Dharmakīrti であると特定される根拠を示す。つまり、対論者の主張する「空」として、Dharmakīrti の無知覚 (anupalabdhi)、特に、それ自体の無知覚 (svabhāvanupalabdhi) の理論が取り上げられている。それを II. で中観派は、『楞伽經』を典拠として、対論者の主張する「空」とは、世俗としての彼々空性 (itaretaraśūnyatā) であると論難し、中観派の意味する「空」は、勝義としての相空性 (lakṣaṇaśūnyatā) であると、「空」の意味を峻別している。

さらに、修習 (bhāvanā) を通じて獲得されるヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) によってこそ一切法無自性は直観され得ると論証する。その背景として、プラマーナによる無自性論証にも、修道論としての諸哲学の観察と超越という順次向上して行く構図が読み取れ、哲学の深化、向上は修習 (bhāvanā) の質的高揚に応じてあり得ることが示される。つまり、後期中観派は、哲学と修習の一致を示す体系として、Dharmakīrti のヨーギンの直接知覚論を、無自性論証として活用しているのである。これ等の諸点を以下で明確にしよう。

I. 無自性語証と直接知覚 (pratyakṣa)

——Māl 前主張解説——

《直接知覚 (pratyakṣa) によって一切法無自性は把握され得るのか》という問題を巡って Māl の前主張⁽⁶⁾、後主張⁽⁷⁾で、論議が展開されている。この問いかけを提示し、Kamalaśīla と論争するのは誰であろうか。それは Dharmakīrti

(5) MAV ad MAK 73-75.

(6) ⇒ (101)~(105).

(7) ⇒ (201)~(202), この Māl 前主張・後主張での一切法無自性は、論理 (Nyāya) によって証明されるか、否かを巡る論議の要約は、拙稿、『中観光明論』と『ロサル宗義書』(仏教論叢第32号, 1988) pp. 72-77.

であると考えられる。その根拠を以下で跡付けよう。

まず前主張 [Ob-1]⁽⁸⁾ で、対論者は、① 〈直接知覚 (pratyakṣa) の対象 (viṣaya) は、実在物 (vastu) である〉と述べることによって、一切法無自性は、直接知覚の対象となり得ないと詰問している。これは、次のものに同定されよう。

Dharmakīrti の NB 1・12

それ（直接知覚）の対象は、個別相である。

tasya viṣayaḥ svalakṣaṇam⁽⁹⁾

さらに NB 1・15 等での、実在物 (vastu) の特性を因果効力 (arthakriyāsāmarthya) に求める点から [Ob-1] は導出されよう。したがって [Ob-1] は、Dharmakīrti による詰問と想定出来よう。

[Ob-2]⁽¹¹⁾ で、非実在物 (avastu) は無自性 (niḥsvabhāva) であり、知を生起せしめ得ない、と規定するに対し、事物 (vastu) は、因果効力 (arthakriyāsamartha) を有するものと規定している。この vastu と avastu との峻別の基準を arthakriyāsamartha の有無に求め、avastu を無自性と確定するのは、次に示すような Dharmakīrti の考え方である。PV 現量 (48ab)

(一般相は実在物ではない。) 何としても、知に、その自性が顕現しないからである。

kathañcid api vijñāne tadrūpānavabhāsaḥ /⁽¹²⁾

PV 現量 (50)

まさしく、それ故に、それ（一般相）は、知一般という結果を設けることに關しても、効力をもたない。それ（一般相）は、効力を持たない故、無自性である。なぜなら、それ（無効力）は、非実在物に関する特徴であるから。

jñānamātrārthakaraṇe'py ayogyam ata eva tat /

(8) ⇒ (101)。

(9) NB 1・12. p. 12¹³.

(10) NB 1・15. p. 13¹⁵. ⇒ (17), (18).

arthakriyāsāmarthyalakṣaṇatvād vastunaḥ

実在物には、因果効力という特徴があるからである。

(11) fn (102).

(12) 戸崎(出) p. 116. 及び同 fn (130).

tad ayogyatā 'rūpaṁ tad dhy avastuṣu lakṣaṇam // ⁽¹³⁾

すなわち、Dharmakīrti にとって、無自性なものとは、知に顕現しないものの、因果効力 (arthakriyāsamartha) を有さないものであり、一般相 (sāmānyalakṣaṇa) を有するものである。他方、PV 現量 ⁽¹⁴⁾ (3) に示される如く、因果効力を有するものは、独自相 (svalakṣaṇa) を有するものであり、それは、有自性と言い得るであろう。ところが、中観派にとっては、〈結果をもたらすこと (arthakriyā) も無自性である⁽¹⁵⁾〉、決して、そこに自性 (svabhāva) を想定することはない。

さらに [Ob-2] ⁽¹⁶⁾ の後半の〈実在物 (vastu) の特性を因果効力〉と述べる点は、以下のものに同定し得よう。

NB 1・15

実在物には、因果効力という特性があるからである。

arthakriyāsāmarthyalakṣaṇatvād vastunaḥ. ⁽¹⁷⁾

HB 3*¹⁴

arthakriyāyogyalakṣaṇaṁ hi vastu. ⁽¹⁸⁾

したがって、この [Ob-2] も [Ob-1] と同様、対論者は Dharmakīrti であると特定し得よう。

[Ob-3] ⁽¹⁹⁾ は〈直接知覚は、有自性 (sasvabhāva)〉との見解に立つ対論者の詰問である。この見地は、先にも示したように NB 1・12 ⁽²⁰⁾ 〈直接知覚の対象は、独自相である〉⁽²¹⁾、PV 現量 (48ab) ⁽²²⁾ (50) 〈一般相を有する非実在物 (avastu)

(13) 戸崎(出 p.119. 及び同 fn (140).

(14) 戸崎(出 p.61.

arthakriyāsamarthaṁ yat tad atra paramārthasat /
anyat saṁvṛtisat proktaṁ te svasāmānyalakṣaṇe //

(15) Śāntarakṣita の SDP ad SDK 12. D27a⁶.

(16) fn (102).

(17) NB 1・15 p.13¹⁵. ⇒ (10).

(18) ⇒ (10).

(19) fn (103).

(20) fn (9).

(21) fn (12).

(22) fn (23).

は、知を生起し得ず、無自性 (arūpa, niḥsvabhāva)⁽²³⁾ である〉という点から導出されよう。さらに次の NB 2・15 を見れば、対論者の〈直接知覚は有自性〉との見地が明白となろう。

NB 2・15

認識する為の他の諸縁が存在しているとき、まさしく直接知覚されるものが、自性である。

satsv anyeṣūpalambhapatyayeṣu yaḥ pratyakṣa eva bhavati sa svabhāvaḥ⁽²⁴⁾

したがって、この [Ob-3] も、Dharmakīrti の見解であると知られよう。

[Ob-4]⁽²⁵⁾ は、対論者の「空」の理解と中観派の「空」との相違を知る上で、重要な問題を含んでいる。この対論者の「空」は、中観派によって「彼々空性 (itaretaraśūnyatā)」と批難され、それは Dharmakīrti の無知覚 (anupalabdhi) の理論と特定し得るが、その根拠は、後に示すことにする。その前に、[Ob-5] を検討しておく。

[Ob-5]⁽²⁶⁾ で、対論者は、〈一切法無自性は、ヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) によって知られるという中観派の見解には、論理性 (yukti) がない〉と詰問している。なぜなら、プラサンガ論法により、ヨーギンの直接知覚が、有であっても、無であっても、中観派の主張は崩れると難じている。このヨーギンの直接知覚を巡る詰問も、Dharmakīrti の理論と考えられる。この点は⁽²⁷⁾ II. で詳述する。

さて [Ob-4]⁽²⁸⁾ 及びその後主張 [An-4]⁽²⁹⁾ を中心として、対論者の「空」とは、中観派の「空」と対立し、それは Dharmakīrti の無知覚 (anupalabdhi) の理論に特定し得る根拠を示そう。その決め手は [Ob-4]、[An-4] に加え、Śāntarakṣita, Haribhadra の論述から得られる。

[An-4] で、Kamalaśīla は、『楞伽經』を典拠に対論者の理解する「空」の

(23) 戸崎(出) p.119. fn (140).

(24) NB 2・15. p. 23⁵.

(25) fn (104).

(26) fn (105).

(27) ⇒ (55)-(88).

(28) fn (104).

(29) ⇒ (204).

意味は、世俗としての彼々空性 (itaretaraśūnyatā) であって、勝義としての、相空性 (lakṣaṇaśūnyatā) ではないと論難している。⁽³⁰⁾ Kamalaśīla により、世俗としての「彼々空性」であると難じられる対論者の指示する「空」とは、次のものである。

① (A)を欠いている〈(A)として空である〉ある場所 (pradeśa) (B)を把握して、(A)の空であること (śūnyatā) が、直接知覚 (pratyakṣa) によって知られる。⁽³¹⁾ Kamalaśīla は、上述のように、対論者の解する「空」と中観派の「空」の意味とを各々、「彼々空性」、「相空性」とに峻別したことに続いて、中観派の「空」の意味をさらに次のように解説している。

^{(32)...}一切法の相空性とは、一切法の無顕現な (nirābhāsa) 知 (jñāna) を生起することによって知られる。なぜなら、それら (一切法) の個別と一般相 (sva-, sāmānyalakṣaṇa) が、確定されたままに②知覚の条件を得ていても (upalabdhilakṣaṇaprāptasya), 諸のヨーギンは、勝義の形象 (ākāra) を知覚しないから (anupalabdher), 一切法の無顕現な知を生起することによって、知識を確定するのである。それ故に、最も劣ったものである彼々空性は、童子 (kumāra) によって、構想されたもの (parikalpita) に依存して言われているけれども、それは、[勝義的な空性とは] 必然関係のないもので^{...32)}ある。

上述の①, ②から、それ等が Dharmakīrti の次の見解を指すことが知られよう。

NB 2・13

そのうち無知覚とは、例えば、ある特定の場所に壺が存在しない。知覚の条件が得られていても、知覚されないからである。(tatrānupalabdhir yathā na pradeśeṣe kvacid ghaṭa upalabdhilakṣaṇaprāptasyānupalabdher iti)⁽³³⁾

以上のように Kamalaśīla は②で NB 2・13 を活用して答弁している故、こ

(30) ⇒ (204b)–(204e).

(31) ⇒ (104), (204a).

(32) ⇒ (204f). cf. BhKI [211] II. 1–2.

(33) NB 2・13. p. 221^{1–2}.

こでも、Dharmakīrti の見解を逆用して自派の見解を実証しようとしている。

①が Dharmakīrti の無知覚 (anupalabdhi) に対する定説を指すものであることを決定する為に、次に示す Māl の論述と Dharmottara の見解及び Haribhadra の無自性論証に関する論述を見てみよう。

Māl 前主張 [P145a⁸-b⁴, D135a⁶-b²]

無知覚 (anupalabdhi) も、それ (一切法無自性、諸法空寂) を証明し得ない。というのは、まず、無という言葉表現 (abhāvasya vyavahāraḥ)^(33 a) を成立させるそれ自体の無知覚 (svabhāvānupalabdhi) というものが、直接知覚 (pratyakṣa) によって、(A)を欠いている事物(B)を知ることであるなら、^(33 b) 正しくない論書を聴聞することで、愚かな (vimūḍha) 意の、ある者達、つまり、(B)に(A)が欠けているという言葉表現 (vyavahāra) をしない人々^(33 c) に対して、それ (BにおけるAの無) の表現をなさしめる為に [それ自体の無知覚を] 推論するのであるが、汝 (中観派) には、(B)に関してそれ (Aが無であること) の言語表現を成り立たせるもの、すなわち、直接知覚 (pratyakṣa) によって知られる、そういった、一切法 (sarvadharma) [A]を欠いている事物 (vastu) [B]は、何ら存在しない。[もし、(A)を欠いた(B)が存在するなら] 自己の主張 (中観派の一切法無自性) が崩れてしまうであろうから、と述べ^(33 d) 終っている。

この詰問に対して Kamalaśīla は次のように答えている。

Māl 後主張 [P193b³⁻⁴, D177a²⁻³]

(33 a) ⇒ NBṬ p. 29²², NBṬ(Tib) p. 67⁸, NB 2·29.

(33 b) ⇒ (31), (104), (204 a).

NB 2·32, p. 31¹⁻².

svabhāvānupalabdhir yathā, nātra dhūma, upalabdhi lakṣaṇaprāptasyānupalabdher iti.

それ自体の無知覚とは、例えば、ここ(B)に、煙(A)が存在しない。知覚の条件が得られていても、知覚されないから、というものである。

(33 c) Dharmakīrti によれば、対象の無存在 (abhāva) は、直接知覚のみによって知られるのであるが、無知覚 (anupalabdhi) の理論を提出するのは、愚者の為である。

PV-sv, p. 5.¹⁸⁻²³

Y. Kajiyama, Studies in Buddhist Philosophy (1989). p. 266. fn (204).

PV 現量 (99). 戸崎(出) p. 173, 175 fn (253). pp. 204-205. fn (9).

(33 d) Māl 前主張 [P144a⁸-b⁶, D134a⁷-b⁶] ⇒ (101)-(105).

また、それ自体の無知覚 (svabhāvānupalabdhi) は、〔一切法無自性を証明し〕得ない、というその詰問に関しては、先に答えている。^(33 e) この（それ自体の無知覚の）論理が、彼々空性 (itaretarāśūnyatā)^(33 f) であるなら、これも〔一切法無自性を〕証明するとは〔我々中観派は〕主張しない。

[反論]

なぜであるか。

[答論]

〔我々中観派の意味する「空」とは〕相空性 (lakṣaṇaśūnyatā)^(33 g) である。

この Māl 前・後主張から、①が Dharmakīrti の無知覚 (anupalabdhi), 特に、それ自体の無知覚 (svabhāvānupalabdhi) の理論を指示していることが明らかになろうし、それが、彼々空性 (itaretarāśūnyatā) として批難されることも知られる。この論理が、中観派の意味する「空」つまり相空性 (lakṣaṇaśūnyatā) と峻別されるのである。

Dharmottara の NBṬ には、

^(34...)
仮に、壺が存在しない、という知は、無知覚 (anupalabdhi) からこそ生起する。またこのことこそが、無存在 (abhāva) の確定であるとしても、そうではあっても、^(34 a...)
〔壺の存在しない〕ただの場所は、直接知覚 (pratyakṣa) によって知覚されるのであるから、ここに壺は存在しない、というこういったことは、また、直接知覚の作用 (pratyakṣavyāpāra) に従うのであり、無存在の確定なのである。^{...34 a)}したがって、直接知覚の〔壺の存在しない〕ただの

(33 e) Māl 後主張 [P185a⁴-b⁵, D169b⁸-170a⁵] ⇒ (204).

(33 f) ⇒ (204 b), (204 c).

(33 g) ⇒ (204 b).

(34) NBṬ. p. 30¹⁻⁴.

yady api ca nāsti ghaṭa iti jñānam anupalabdher eva bhavaty ayam eva cābhāvaniścayaḥ tathāpi ^(34 a...) yasmāt pratyakṣeṇa kevalaḥ pradeśa upalabdhāḥ tasmād iha ghaṭo nāstīty evaṁ ca pratyakṣavyāpāram anusaraty abhāvaniścayaḥ / ^{...34 a)} tasmāt pratyakṣasya kevalapradeśagrahaṇavyāpārānusāryabhāvaniścayaḥ pratyakṣakṛtaḥ /

Cf. TS. (1682)ab ⇒ (45), (34 a) 下線部 cf. TSP. 586²⁴-587⁷

yatrāpi kevalapradeśopalambhād ghaṭābhāvasiddhiḥ sāpi ghaṭopalambhākhyakāryānupalabdhir eva

場所を認識する作用に従って起ってくる無存在の確定は、直接知覚によってなされるのである。^{…34)}

以上のことから、あるもの(A)が、ある場所(B)に存在しない、すなわち(B)が(A)を欠いている、(A)として空である、ということは無知覚(anupalabdhi)から生起することなのではあるが、(A)の存在しない(B)自体は、直接知覚(pratyakṣa)によって知られる、という Dharmottara の見解が把握される。したがって、①に示した、すなわち Kamalāsīla によって彼々空性(itaretarāśūnyatā)と論難される対論者の解する「空」とは、Dharmakīrti の提言する無知覚(anupalabdhi)の定説であることが、Dharmottara の論述からも明らかとなる。このことは Haribhadra (及び Kamalāsīla) の取り上げる反論者の詰問の中にも見て取ることが出来る。そこでの反論者の趣旨は、以下で示すように、無自性には直接知覚による拒斥(pratyakṣabādhā)があると詰問するものである。

〔反論〕

^(35…)
〔I〕増益された実としての生起(samāropitatāttvikotpatti)等の形象を離れている点で、吟味しない限り素晴らしい(avicāraikamanohara)存在の本性(bhāvasvabhāva)こそが、無自性性(niḥsvabhāvatā)という言葉で表現される。また、その存在の本性(bhāvasvabhāva)には、直接知覚される性質(pratyakṣatva)^(35 a)があるから、その本性となっている無自性性も、まさしく直接知覚されるのである。〔無自性性とは〕壺を欠いた地面が知覚されている時のように、その本体であるものが、壺を欠いていることなのである。^(35 b)

(35) AAPV. p. 636²⁷-637¹. = MAP. p. 245⁵⁻²⁰, 247⁷⁻¹⁰. この〔反論〕に対する〔答論〕は、本稿 fn (79). cf. 「実としての生起」に関しては本稿(79 a), AAPV. p. 976¹⁻³. 拙稿[2] p. 39. (122).

(35 a) cf. NB 2·15. p. 23⁵.

認識されるための他の諸縁が存在しているとき、まさしく直接知覚されるものが、自性である。

satsv anyeṣūpalambhapratyayeṣu yaḥ pratyakṣa eva bhavati sa svabhāvaḥ

(35 b) ⇒ 本稿 (33), (34). MAV. p. 246¹⁻³.

ここでの対論者の主張は、壺の無存在の理解のように、無(abhāva)は、直接知覚(pratyakṣa)によって知られる、というものである。したがって、同様に無自性性(niḥsvabhāvatā)も、直接知覚されるのではないかと中観派に対し詰問するのである。この論義の背景として Dharmakīrti の無知覚(anupalabdhi)の理論が特定されることの根拠をさらに示す為に、次の Dharmottara の見解を見ておこう。

NBT. pp. 28²¹-29².

〔Ⅱ〕さもないければ、瞑想と幸福とが区別されるから、無差別性 (avyatirekatā)^(35 c)が、崩れる。したがって、また、存在 (bhāva) は、無自性ではないであろう。無自性性には、〔存在との〕必然関係がない (asambandha) からである。^(35 d) またそれから生起することを特徴とする必然関係 (tadutpattilakṣaṇaḥ sambandhaḥ) もない。非実在性 (avastutva) という点で、それ (無自性性) には、〔実在物の〕結果としての性質がない (akāryatva)^(35 d) からである。したがって、凡夫によって、それ (無自性性) は、直接知覚に基づいて確定されないから、〔無自性性〕直接知覚によって拒斥されるものである (pratyak-
ṣābādhā)^{…(35)}。

この Haribhadra の AAPV に見られる対論者の詰問は、——の部分は、Śāntarakṣita の MAV⁽³⁶⁾ での論述に一致し、その他は、Kamalaśīla の MAP⁽³⁷⁾ と同定されるものである。したがって Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra の三者は、対論者の中観派への「無自性」「空」に関する詰問として、Dharma-

tato hi dṛśyamānād arthāt tadbuddheś ca samagradarśanasāmagrīkatvena pratyakṣatayā sambhāvitasya nivṛttir avasīyate / tasmād arthajñāna eva pratyakṣasya ghaṭasyābhāva ucyate / na tu nivṛttimātram ihābhāvo nivṛttimātrād dṛśyanivṛtṭyāniścayāt / nanu ca dṛśyanivṛttir avasīyate dṛśyānupalambhāt /

それ故に、あらゆる見ることの要因の集合があって、見られている対象とその知とから直接知覚として考えられる無存在が、確定される。したがって、直接知覚にとって、対象を知ることこそが、壺の無であると言われる。一方、この場合、無存在一般が無なのではない。無存在一般から、見らるべき対象の無存在は決定されないからである。

(35 c) 地面の知覚が壺の無存在を意味しないなら、すなわち、同一の事柄でなければ、無差別性が成立しない、との意味であるから、AAPV. p. 637⁸ は abhinna であるが Vaidya 本 p. 465²² による bhinna と読む。cf. AAPV. p. 629¹. = Vaidya p. 460²⁸.

(35 d) PV 現量 (44)ab. 戸崎 (4) p. 112.

asambandhaś ca jātīnām akāryatvād arūpatā.

諸の種 (= 一般相) には、(個物の) 結果としての性質がないから、(個物との) 必然関係はなく、また、自性も存在しない。

同, (50). 戸崎 (4) p. 119.

jñānamātrārthakaraṇe' py ayogyam ata eva tat /

tad ayogyatayā' rūpaṁ tad dhy avastuṣu lakṣaṇam //

まさしく、それ故に、それ (一般相) は、知だけの目的を達成することに関してさえも、効力がない。それ (一般相) は、効力がない故、無自性である。というのは、それ (無効力) は、諸の非実在物に関する特徴である。

(36) ⇒ (35b).

(37) ⇒ (35).

kīrti の「無知覚 (anupalabdhi)⁽³⁸⁾」の理論を想定していたことが知られる。さらに、いま見た Haribhadra の論述を基に、詰問の内容を分析し、対論者 (Dharmakīrti) の考える「無自性」⁽³⁹⁾とは何であるのかを検討しよう。

先の詰問の前半では、Māl 前主張 [Ob-4]⁽⁴⁰⁾と同じく、〈(A)が(B)に存在しないこと、つまり、(B)は(A)として空である〉という構図から、

(B)の直接知覚 ⇒ (B)における(A)の無 (abhāva) ⇒ (B)における(A)の空性 (śūnyatā)

したがって、この意味での「空性」というものは、直接知覚されるのではないか、というのが、対論者の詰問の第一である。しかし、Kamalaśīla は、[An-4]⁽⁴¹⁾でこの意味での「空性」すなわち、(B)における(A)の空性 (śūnyatā)、を中観の空、相空性 (lakṣaṇaśūnyatā) と区別して、彼々空性 (itaretaraśūnyatā) と難じ、それは、凡夫によって構想されたものに基づく、「空性」の意であると論難する。

後半の詰問 [Ⅱ] では、〈直接知覚 (pratyakṣa) の対象とするものは実在物 (vastu) である⁽⁴²⁾〉ことを根拠に、無自性性 (niḥsvabhāvatā) には、実在物 (vastu) としての性質がない故、凡夫によって直接知覚され得ないというものである。この点については、凡夫ではなく、ヨーギンの知、直接知覚 (yogipratyakṣa) によって、「無自性」「空」は直観され得る、との解答を与える。⁽⁴³⁾他方、対論者 (Dharmakīrti) の指示する無自性性とは、実在物 (vastu) との必然関係をもたない無能力なものであり、壺の無に象徴される無存在 (abhāva)⁽⁴⁴⁾である。

なお、Dharmakīrti にとっては、〈大地(B)の直接知覚に基づいて、壺(A)の無存在が、推理 (無知覚) される〉、やはり無知覚 (anupalabdhi) は推理

(38) NB 2・13 ⇒ (33), (34).

(39) Dharmakīrti にとり無自性なものとは種 (jāti) つまり、一般相を有するものである。⇒ PV 現量 (25)–(27), 戸崎(出) pp. 87–93.

(40) ⇒ (104).

(41) ⇒ (204).

(42) ⇒ (102b), (17), (18).

(43) ⇒ (205), (201 c), (202), (204f).

(44) ⇒ (35d) PV 現量 (44)ab, (50), fn (39).

(anumāna) であって、「無存在」の確定は、(B)の直接知覚と(A)の無知覚とから成立しよう。この点についても、Śāntarakṣita, Kamalaśīla は批判している。

TS (1682)ab

tasmād ekasya yā dṛṣṭiḥ saivānyādṛṣṭir ucyate

したがって、あるもの(B)の知覚こそが、まさしく他のもの(A)の無知覚であるといわれる。

Kamalaśīla は、このことを TSP で、次のように解説している。

tasmād ekopalabdhir evānyasyānupalabdhir iti nābhāvo nāma pṛthakp-
ramāṇam pratyakṣāt ⁽⁴⁵⁾ /

したがって、あるもの(B)の知覚こそが、まさしく他のもの(A)の無知覚である、ということは、無とは直接知覚とは別なブラマーナを必要としない。

Dharmakīrti の見解では、「無」(abhāva) の確定には、直接知覚と無知覚という二種のブラマーナを必要としようが、ここで Śāntarakṣita や Kamalaśīla は「無」は、直接知覚 (pratyakṣa) のみによって決定される、と述べる。さらには、「無知覚 (anupalabdhī) とは、壺等を欠いている大地等を認識する故、直接知覚である⁽⁴⁶⁾」とする見解は、Jñānagarbha 以来のものである。以上からして、Kamalaśīla が、Māl 前主張 [Ob-4] で、対論者の理解する空性つまり〈(B)における(A)の空なること〉を、後主張 [An-4] で、彼々空性 (itaretarāśūnyatā) と難じるものは、Dharmakīrti の無知覚 (anupalabdhī) の理論を対象とするものであることが知られる。

この中観派の意味する「空性」すなわち、相空性 (lakṣaṇaśūnyatā) と異なる対論者の意味する「空性」——(B)における(A)の空なること——これが Māl 後主張 [An-4] で、世俗としての彼々空性 (itaretarāśūnyatā) と難じられるものは、実は、Dharmakīrti の無知覚 (anupalabdhī), 取り分け、それ自体の無知覚 (svabhāvānupalabdhī) の理論を指すということが筆者の結論であるが、このことと関連して以下のことを一考しておく必要がある。

(45) TSP. p. 584¹⁹⁻²⁰.

(46) 拙稿 [2]. p. 11. fn (35 g).

この彼々空性 (itaretarāśūnyatā) を、D. Seyfort Ruegg⁽⁴⁷⁾ 氏と松本史朗氏⁽⁴⁸⁾ は、*Bodhisattvabhūmi* 『菩薩地』に見出される「空」の意味と関係付けて解釈されている。さらに、彼々空性を Jo nañ pa の主張する gzan stoñ⁽⁴⁹⁾ 説に、相空性を rañ stoñ 説に関連するものとして示される。

Bodhisattvabhūmi に示される「空」とは次のものである。

yad yatra na bhavati tat tena śūnyam iti samanupaśyati yat punar
atrāvaśiṣṭaṁ bhavati tat sad ihāsītīti yathābhūtaṁ prajānāti.⁽⁵⁰⁾

(A)が(B)に存在しない、その(B)は(A)として空であると正しく見る。また、そこに残されているものがここでの実在であると如実に知る。

それは、また Dr. E. Obermiller^(50a) によって *Abhidharmasamuccaya* の、さらに長尾雅人博士⁽⁵¹⁾ によって *Bodhisattvabhūmi* の他に『中辺分別論』のものが示されるように唯識派の「空」の意味として典型的なものであろう。それ等は、また原始經典『小空經』(*Cūḷasuññata-sutta*)^(51a) にまで遡源し得るという。しかし、Māl 前主張 [Ob-4] 及び [An-4] を検討すれば、そこでの対論者の考える「空」とは、直接的には、先に示した通り、やはり Dharmakīrti⁽⁵²⁾ の無知覚 (anupalabdhi) 特に、それ自体の無知覚 (svabhāvānupalabdhi)^(52a) の理論を指示していると筆者は考える。とはいえ、その無知覚 (anupalabdhi) の理論は〈(B)における(A)の無 (空) なること〉を表わす点では、*Bodhisattvabhūmi*

(47) La théorie du Tathāgatagarbha et du gotra, Paris 1969, p. 322, 325, 326, 332, 343.

(48) Lañkāvatāra on itaretarāśūnyatā (駒沢大学仏教学部論集第14号, 1983) p. 350, p. 344. note (1)-(6).

(49) D. S. Ruegg, The Jo nañ pas: a School of Buddhist Ontologists according to the Grub mtha' śel gyi me loñ (Journal of the American Oriental Society, Vol. 83. no. 1. January-March, 1963.) pp. 73-91.

(50) BBh. p. 47¹⁷⁻¹⁹.

梶山雄一『大乘仏典15世親論集』解説 pp. 415-416.

(50a) The term *Śūnyatā* and its different interpretations (Journal of the Greater India Society 1 (1934). p. 107-108.

(51) 空性に於ける「余れるもの」、『中観と唯識』pp. 542-560.

(51a) 長尾雅人前掲書 pp. 543-549, 藤田宏達『原始仏教における空』(仏教思想7 空下) pp. 450-454.

(52) ⇒ (31)-(35), (104), (204). esp. (33a)-(33g).

(52a) ⇒ (33b).

や『中辺分別論』に示される、いわゆる、「余れるもの、残ったもの」(avaiśṣṭam)と基本的には同じであろうから、Dharmakīrti の〈無知覚の理論〉——この場合の空とは、(B)における(A)の無存在 (abhāva) のことである⁽⁵³⁾——と、唯識派の「余れるもの」とが、中観派の「空」つまり勝義の形象 (ākāra) さえ知覚しないヨーギンの一切法の無顕現な知によって把握される相空性 (lakṣaṇasūnyatā) と対立する点を克明に知ることは、「空」の理解にとって不可欠であろう。それが、Kamalaśīla によって、『楞伽經』を典拠に、彼々空性と相空性として峻別されることの意味なのである。⁽⁵⁴⁾

以上からして Māl 前主張 [Ob-1] ~ [Ob-5] に至る対論者による中観派の「一切法無自性」に対する詰問は、全て、Dharmakīrti の立場に基づくものである。形式としては、Dharmakīrti による中観派批判なのである。それに対して、Kamalaśīla は Māl 後主張で、以下に示すようにその詰問に答え、Dharmakīrti のヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) の理論を活用しつつ、「一切法無自性」は、直接知覚され得ることを示し、一切法無自性が、直接知覚によって証明され得ることを論じるのである。これが、まず、直接知覚 (pratyakṣa) としてのプラマーナによる吟味に、「一切法無自性」が耐え得ることの証左である。また同時に Dharmakīrti 批判も展開している。それは、Dharmakīrti の無知覚 (anupalabdhi) ——それ自体の無知覚 (svabhāvānupalabdhi) の理論を、世俗としての彼々空性 (itaretarasūnyatā) であると判定し、中観派の勝義としての相空性 (lakṣaṇasūnyatā) と峻別するものである。

II. 無自性論証とヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa)

——Māl 後主張解説——

1. ヨーギンの直接知覚

I. での検討の結果、Māl 前主張 [Ob-1] ~ [Ob-5]⁽⁵⁵⁾ は、Dharmakīrti の中観

(53) ⇒ (34), (45).

(54) Candrakīrti も唯識思想に関して、『楞伽經』を典拠にこの「彼々空性」に言及している。MAT. p. 160¹⁷⁻²⁰. p. 308¹⁷⁻²⁰. cf. 小川一乗『空性思想の研究』p. 173, 331.

(55) ⇒ (101)-(105).

派批判、——中観派の「一切法無自性」は pramāṇa まず直接知覚 (pratyakṣa) によって証明され得ないとする詰問——を内容としている。これに対し, Kamalaśīla は Māl 後主張で答論を構成しているが、その答論の機軸となっているものは, Dharmakīrti の〈ヨーギンの直接知覚〉論を活用することによって、「一切法無自性」は、修習 (bhāvanā) を通じたヨーギンによって直観され得ることを示すものである。以下この点を [Ob-1]~[Ob-5] に対する [An-1]~[An-5]⁽⁵⁶⁾ を順に検討することによって明らかにしよう。

Kamalaśīla は [Ob-1]⁽⁵⁷⁾ に対する [An-1] で、

凡夫達の直接知覚は、眼病者 (taimirika) の直接知覚のように、色等の虚偽な対象を有するが、実なる実在物 (vastu) の自性を対象としない。⁽⁵⁸⁾

と述べ、また〈ヨーギンの知 (yogijñāna) も実在物 (vastu) を対象とするものでない〉⁽⁵⁹⁾ とするし〈ヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) によって、一切法無我は知られる〉⁽⁶⁰⁾ と言明する。これは、Dharmakīrti が、四種の直接知覚のうち、ヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) を立てることを逆手に取って答えているものと言えよう。このことは [Ob-2]⁽⁶¹⁾ に対する Kamalaśīla の答弁 [An-2] を見れば一層明白となる。そこで、Kamalaśīla は

「諸の偉大なヨーギンは、真実の対象 (bhūtārtha) を修習して、最勝の極みから生起した (prakarṣaparyantajam) 精神集中を獲得しているから……」⁽⁶²⁾ と弁明しているが、これは、次の Dharmakīrti の述べるヨーギンの知の特性に同定される。

NB 1・11

bhūtārthabhāvanāprakarṣaparyantajam yogijñānam ceti⁽⁶³⁾

また [Ob-3]⁽⁶⁴⁾ に対する [An-3] では「世俗 (saṃvṛti) として、ヨーギンの

(56) ⇒ (201)-(205).

(57) ⇒ (101), (201a).

(58) ⇒ (201g).

(59) ⇒ (201h).

(60) ⇒ (201c).

(61) ⇒ (102), (202a).

(62) ⇒ (202b).

(63) NB 1・11, p.11¹⁷.

(64) ⇒ (103), (203a).

直接知覚は因 (kāraṇa) を有するものと承認する⁽⁶⁵⁾」と述べ、Dharmakīrti の提言するヨーギンの直観 (yogipratyakṣa) を世俗として承認する。これも、Dharmakīrti の見解を活用し自説を実証するものである。

[An-4] では「知覚の条件が得られていても (upalabdhi lakṣaṇaprāptasya), 諸のヨーギンは、勝義の形象 (ākāra) を知覚しないから (anupalabdher) 一切法の無顕現な知を生起することによって、知識を確定する⁽⁶⁶⁾」と論述するものは、ヨーギンの知と無知覚 (anupalabdhi) の理論 [NB 2・13]⁽⁶⁸⁾ を合体させて述べるものである。

[Ob-5] で、対論者は、中観派の主張する一切法無自性がヨーギンの直接知覚によって直観されるということには、論理性 (yukti) がない、と詰問している⁽⁶⁹⁾。つまり、ヨーギンの知も無なら、どうして、それが、確実な認識方法 (pramāṇa) と言えようかと反問している。

これに対し、Kamalaśīla は [An-5] でヨーギンの知が、中観派にとってもプラマーナとなり得ることを論じる際、Dharmakīrti の示す直接知覚の特性、すなわち、

直接知覚とは、概念知を離れ、迷乱無きことである (pratyakṣam kalpanā-poḍham abhrāntam)⁽⁷⁰⁾。

を挙げ、自己の立論に活用している。さらに、次のように述べている。

⁽⁷¹⁾ 修習 (bhāvanā) によっても、対象 (artha) が存在しない場合ですらも、極めて明瞭な知 (jñāna) が生起する。例えば、欲望、悲しみ、恐怖、狂気等によって汚された人々が、何度も何度もくり返し行った修習によって女人

(65) ⇒ (203b).

(66) ⇒ (204f). cf. BhKI [211] II. 1-2.

(67) PV 現量 (281)-(286). 戸崎(出 pp. 376-380. NB 1・11 ⇒ (63). ヨーガ行者の知に関する Dharmakīrti の見解の詳細な研究は、岩田孝『ヨーガ行者の知の整合性について——法称説を中心にして——』(峰島旭雄編著『比較思想の世界』1987年5月) pp. 179-206.

(68) ⇒ (33).

(69) ⇒ (105), (205a).

(70) Māl P185b⁶⁻⁷, D170a⁶⁻⁷. ⇒ (205b), NB I. 4, PVin p. 40², PV 現量 (123)ab. 戸崎(出 p. 204, 388. fn. (20), TS(1213)a.

(71) Māl P185b⁷-186a¹, D170a⁷-b¹. ⇒ (205c).

等を極めて明瞭に顯現する知を生起するように。なぜなら、彼らによって、それ（女人）等が面前に存在しているかのように知覚された直後に、身体等の多なる形象を有した動きが開始される如きだからである。^{…(71)}

これも同じく Dharmakīrti の PV 現量 (281) (282) を活用しての答弁であろう。そこで Dharmakīrti は、ヨーギンの知に関して、次のように述べている。

先に言及したヨーギン達の知とは、彼等の修習によって起こされたものであり、概念知という網を離れ、明瞭に現われる。

prāg uktam yoginām jñānam teṣām tad bhāvanāmayam /
vidhūtakalpanājālaṁ spaṣṭam evāvabhāṣate // (281)⁽⁷²⁾

欲望、悲しみ、恐怖、狂気、泥棒の夢等によって乱された人々は、非実在なものであっても、面前に存在するかのように知覚する。

kāmaśokabhayonmādacaurasvapnādyupaplutāḥ /
abhūtān api paśyanti purato' vasthitān iva // (282)⁽⁷³⁾

さらに Kamalaśīla は、ヨーギン達の無我を瞑想している知は、整合性を有し (avisamvāda), 直接知覚としての確実な知 (pramāṇa) であることを論じているが、⁽⁷⁴⁾ これも、Dharmakīrti の PV 現量 ⁽⁷⁵⁾ (286) 「整合しており、修習によって起こされたものが、直接知覚としての確実な知 (pramāṇa) であると認められる」を活用するものであろう。以上のように Kamalaśīla は、一切法無自性は、直接知覚 (pratyakṣa) によって証明され得るか、という難題を、Dharmakīrti による詰問として、Māl 前主張 [Ob-1]～[Ob-5]⁽⁷⁶⁾ を構成し、後主張 [An-1]～[An-5]⁽⁷⁷⁾ では、その同じ Dharmakīrti の理論を逆用しつつ、ヨーギンの無我を修習する知が、プラマーナであるように、一切法無自性も、ヨーギンによって直接知覚され得ると論じるのである。つまり、Dharmakīrti

(72) 戸崎田 p. 376.

(73) 同 p. 378. cf. TSP. p. 493²⁴⁻²⁵ ⇒ (205c)

(74) ⇒ (205e)-(205h). 特に (205h) の解説参照.

(75) ⇒ (86).

(76) ⇒ (101)-(105)

(77) ⇒ (201)-(205). 特に (205h) 解説.

からの、無自性は、直接知覚としてのプラマーナによって立証され得ないとの論難に、ヨーギンの知が、直接知覚としてのプラマーナであることから、ヨーギンの直接知覚(yogipratyakṣa)によって「一切法無自性」は直観されることを示すことを答弁の方法としているのである。

2. ヨーギンの直接知覚と凡夫の知

先の Haribhadra の AAPV での反論者からのく凡夫によって、無自性は直接知覚に基づいて確定されないから〔無自性性には〕直接知覚による拒斥(pradyakṣabādhā)がある。⁽⁷⁸⁾との詰問に、中観派はどう対応しているのだろうか、Haribhadra (及び Kamalāsīla) はそれに答えて、次のように述べる。

^{(79)...}それは正しくない。というのは、増益された形象を離れたものであるから、無自性性(niḥsvabhāvatā)であると言われる。また、それ(無自性性)は存在の自性という言葉(bhāvasvabhāvagrahaṇa)で捉えられるものであるとしても、迷乱(bhṛānti)によって増益された実としての生起(samāropitatta^(79a)ttvotpatti)の形象によって覆い隠された本性のものであるから、刹那性の如く(kṣāṇikatvavat)〔無自性性には〕凡夫(bāla)達によっては、確定されない。それ故に、直接知覚には確定の不合理は存在しないから、〔無自性性には〕直接知覚による拒斥(pratyakṣabādhā)は、存在しない。^{...79)}

これはく無始以来の重苦しい心相続を実在と増益する故、あらゆる有情は、〔空性を〕直観し得ないという Śāntarakṣita の MAK ⁽⁸⁰⁾74 に沿うものであろうが、凡夫によって、無自性は直観されないことを言明している。この無自性を直観し得るのが、ヨーギンの直接知覚なのである。このことを、その先 Śāntarakṣita は MAK 75 で次のように述べている。

^{(81)...}それ(実在)を増益することを断じて、〔無自性を〕知らしめる立証因

(78) ⇒ (35).

(79) AAPV. p. 637¹⁰⁻¹⁸. = MAP. p. 247²⁰⁻²³. 249². ad MAK 74.

(79a) 「実としての生起」に関しては SDV ad SDK 8, 29. 拙稿『後期中観派の学系とダルマキールティの因果論』〈cf. 本稿(3)〉p. 39. (122). ⇒ (35).

(80) MAK 74. p. 246⁹⁻¹².

(liṅga) によって、諸の推理 (anumāna) を知る諸のヨーギン達は、〔無自性を〕直接知覚する。^{…81)}

〔無自性を〕知らしめる立証因、とは、Kamalaśīla によれば、一・多等の立証因⁽⁸²⁾ということである。

無自性を直接知覚し得るのは、凡夫ではなく、ヨーギンである。この凡夫とヨーギンとの相違を Kamalaśīla は Māl で次のように述べ、無自性は、ヨーギンによって直観される故、無自性には直接知覚による拒斥はないと導くのである。これは、又、二諦説と関連して論述される。

Kamalaśīla は Māl 後主張 [An-3] で「ヨーギン達は、幻術師のように、その幻 (māyā) を、ありのままに熟知しているから、〔幻を〕真実 (tattva) として執着することはない。」⁽⁸³⁾と述べ、他方、凡夫について、さらに又、ヨーギンに関して

^{(84)...}見物人のように、それ等生起等の幻を顯現するがまま (yathādarśana) に真実 (satya) であると執着する凡夫達は、顛倒して執着する故、凡夫達と言われる。それ故、世俗 (saṃvṛti) として、修行 (yoga) を伴ったヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) は存在するから、兎の角等のように絶対無 (atyantābhāva) ではない。それ故、直接知覚 (pratyakṣa) によって、あらゆるもの (dharma) は、無我 (anātman) であるとの理解があるから、〔一切法無自性に、直接知覚との〕対立はない (aviruddha)。ヨーギンも、勝義としては、無自性ではあっても、凡夫 (pṛthagjana) 等のように、世間的習慣 (vyavahāra) の上からは、^{…84)}確定される。

世俗として、ヨーギンの直接知覚を承認し、そのヨーギンによって、一切法無自性は直観され得る、というのが Śāntarakṣita 同様、Kamalaśīla の見解である。このことが、又、一切法無自性には、直接知覚による拒斥の存在しな

(81) MAK 75. p. 248¹¹⁻¹⁴.

(82) MAP. p. 249²⁰⁻²².

(83) Haribhadra も AAPV でこの Kamalaśīla の見解を引用している。⇒ (203d). その Haribhadra の引用は Māl からのものではなく Bhk からのものであると考えられる。拙稿『Kamalaśīla と Haribhadra [2]——Haribhadraの引用する Bhāvanāḥ-rama I——(仏教論叢第33号 pp. 6-10. 平成元年9月浄土宗教学院)

(84) Māl P184b^{8-185a³}, D169b³⁻⁵. ⇒ (203f).

いことの証明なのである。すなわち、Dharmakīrti の、ヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) の理論を、この場合も、活用している。世俗的真実の直観は、凡夫によってもなされるが、⁽⁸⁵⁾ 勝義としての真理つまり一切法無自性は、ヨーギンの直接知覚の対象である。ヨーギンの修行 (yoga) による直接知覚と顛倒し執着を有する凡夫の知を峻別するのも、Dharmakīrti の PV 現量 (286) に基づくものであろう。

その場合、整合性のある修習によって起されたものが、直接知覚としての確実な知である、と認められる。先に示された実在のもの (= 四聖諦) [を悟る場合] のように。それ以外のものは、迷妄である。

tatra pramāṇam saṁvādi yat prāñnirṇītavastuvat /
tad bhāvanājam pratyakṣam iṣṭam śeṣā upaplavāḥ ⁽⁸⁶⁾ //

修行 (yoga, bhāvanā) に基づくヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) は、種々の煩惱を有する凡夫の知とは異なることを示すこと、この点も、いま見た Dharmakīrti の論法に範を得たものであろう。このヨーギンの直観と凡夫の知とを峻別し得ることを根拠として、ヨーギンの直接知覚によって、一切法無自性は直観され得ることを Kamalaśīla は論じている。また、ヨーギンの知が、何故、確実な知 (pramāṇa) であるか、ということに関しては、*Tattvasaṁgraha* (TS) に沿い、TSP が「ヨーギンの知は、無分別、無迷乱故に直接知覚としてのプラマーナであると認められる。」(yogijñānam avikalpābhrāntatayā pratyakṣam pramāṇam iṣyate) ⁽⁸⁷⁾ と、主題とするところであろう。Māl では無自性が直接知覚され得る根拠としてヨーギンの知が論じられ、さらにヨーギンの知が、直接知覚としてのプラマーナであることが、同一性の能証 (svabhā-

(85) SDV ad SDK 12.

知は、顕われた形象、顕現を有するという点では、類似していても、顕現するがままに (yathādarśanam, ji ltar snañ ba bzin du) 効力をもたらすこと (arthakriyā) に関して、不整合 (visaṁvādana) と整合 (avisamvādaka) があると確定してから、水等と陽炎等を世間の人々は、実と邪であると知るのである。

(86) PV. 現量 (286). 戸崎(出) p. 380.

(87) TSP, p. 1128¹². 並びに AAPV p. 535¹⁴⁻²². cf. 本稿 (205h)

ヨーギンの知は独自相 (svalakṣaṇa) を対象としていることが示されている。拙稿『Kamalaśīla と Hariḥbhadrā——一切智者の智の証明を巡って——』(印度学仏教学研究 35-1) p. (118) [4].

vaḥetu) に基づく推論によって論じられている。^(87a)

顛倒し、執着を有する凡夫にとっては、「一切法無自性」は直観され得ないが、修習 (bhāvanā, yoga) を伴ったヨーギンの直接知覚によっては、直観されるのである。この yogipratyakṣa に基づく Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra 等の答弁も、Dharmakīrti の PV 現量 (281) (282) (286) 及び NB 1.11⁽⁸⁹⁾ 等で展開される yogipratyakṣa の理論に負っている。⁽⁸⁸⁾

結 論

中観派の提唱する究極の真理「一切法無自性」は直接知覚 (pratyakṣa) によっても、推理 (anumāna) によっても証明されないと詰問する対論者とは、Nāgārjuna の『廻諍論』では、Nyāya 学派であった。⁽⁹⁰⁾ Nāgārjuna 以降、経量部や唯識派、取り分け仏教論理学派が、その対論者として登場し、中観派との間で論争を展開している。その検証の結果、本稿で得られた結論は次のものである。

- 1) Kamalaśīla の Māl での直接知覚による「一切法無自性」の検証は、Dharmakīrti との対論を内容とする。
- 2) 「空」を巡る論争で、Dharmakīrti の無知覚 (anupalabdhi), 取り分けそれ自体の無知覚 (svabhāvanupalabdhi) の理論を世間的習慣 (vyavahāra) 上の彼々空性 (itaretarāśūnyatā) であると批判し、中観派の勝義としての相空性 (lakṣaṇaśūnyatā) と峻別する。
- 3) Kamalaśīla が、「一切法無自性」は直接知覚によって証明されると結論付ける根拠は、一般人の直接知覚ではなく、修習 (bhāvanā) を通じて獲得されるヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) こそが真の確実な認識 (pramāṇa) であるとする点にある。これは、Dharmakīrti の理論を活用するものである。
- 4) 対論者の詰問は [Ob-1~5] ——Dharmakīrti による中観批判を内容とする——の五つからなっていた。それに対して [An-1~5] に、Kamalaśīla の

(87a) ⇒ (205h) のヨーギンの知が直接知覚であることを論じる図式参照。

(88) ⇒ (72), (73), (75), (86).

(89) ⇒ (63).

(90) ⇒ (3).

弁明が示されている。この詰問と答論は、単に五つからなるのみならず、凡夫の知によってではなく、修習(bhāvanā)の結果獲得されるヨーギンの直接知覚(yogipratyakṣa)によって一切法無自性は直観され得るとの構図を示す点からしても五段階として、修習の階梯と一致して順に高度な段階へと超越して行くことを示していると考えられる。⁽⁹¹⁾ [Ob. -1~5] と [An. -1~5] を検討すると、

[I] 直接知覚の対象は実在物(vastu)であるとの詰問を巡って無知という不透明な眼病の薄皮によって智慧の眼が働かない者達の直接知覚や眼病者の直接知覚の如きであり色などの虚偽な対象を有する凡夫達の直接知覚いわゆる一般人の直接知覚が論議の焦点である。

[II] 直接知覚の対象は効果的作用の能力(arthakriyāsamartha)を有するものであるとの追及を巡って、中観派も、兎の角のような効力のない、非実在物を知の因とは考えず、一切法は、陽炎やこだまの如きであると把握する。

[III] 直接知覚は有自性であるのか、無自性であるのか、との詰問を巡って、Kamalaśīla の弁明では、直接知覚による確定を、世俗の真実に依存するものとして承認する。そして直接知覚を世俗的に因を有するものとして、勝義としては無自性であっても、生起することを承認する。すなわち直接知覚を幻の如く、世俗として縁起しているものと承認する。ヨーギンは幻(māyā)を幻として知る。

[IV] 相空性(lakṣaṇasūnyatā)によって勝義として一切法無自性が承認される。一切法の相空性は、一切法の無顯現な知によって知られる。個別相(svalakṣaṇa) [=直接知覚の形象] さえもヨーギンは、勝義の形象とはは認めない。

[V] 一切智者(sarvajña)が、ヨーギンの直接知覚によって、一切法無自性を知る、ことへの対論者の疑念に対して、ヨーギンの無我の知が、直接知覚としての pramāṇa であることを、同一性の証因(svabhāvaḥetu)に基づく推論によって検証している。

(91) ヨーギンの直接知覚(yogipratyakṣa)と加行道の四善根位における入無相方便相の修習との対応関係についての考察は、川崎信定『VII. 一切智者の存在論証』(講座・大乘仏教9——認識論と論理学) pp. 310-311.

この〔Ⅰ～Ⅴ〕の五段階は、Kamalaśīla の修道論の階梯、すなわち〔Ⅰ〕人無我、〔Ⅱ〕法無我、〔Ⅲ〕唯心——有形象唯識説、〔Ⅳ〕所取・能取の形象を欠いた無二知としての直接知覚——無形象唯識説、〔Ⅴ〕一切法無自性の直観へと至る、⁽⁹²⁾ 観察と超越の次第と対応する内容からなる、と言えよう。したがって Kama-
laśīla は論理 (nyaya) による検証でも、段階的に観察とより高度な哲学への
超越を図る方式を採用していると考えられる。⁽⁹³⁾ むしろ論理と修習とは真理の直
観という意味で、元々一致することが目指されていたと言い得よう。

III. 資料——Māl 解説——

Māl 前主張 [P144a⁸-b⁶, D134a⁷-b⁶]

[Objection (Ob)]: 一切法無自性は直接知覚 (pratyakṣa) によって証明され
得ない]

[Ob-1] ^{(101)...} [一切法無自性は] 論理 (nyāya) によっても [証明され得] ない。と
いうのは、まず、直接知覚 (pratyakṣa) によって、あらゆる事物は、空寂
(vivikta) であると知られないであろう。それ(直接知覚)の領域(tadviśaya)
とするところは実在物 (vastu) だからである。^(101 a) ... 101)

[Ob-2] ^{(102)...} 非実在物 (avastu) は、無自性 (niḥsvabhāva) である故、なんとし
ても、自性 (svabhāva) を示すことによって、知識 (vijñāna) が起ってく
る、^(102 a) ということは不合理であるからである。もし [知が] 成立するとすれ
ば、まさしく実在物ということになってしまおう。実在物 (vastu) の特性
は、効果的作用の能力 (arthakriyāsāmarthya) ^(102 b) ... 102) であるからである。

[Ob-3] ^{(103)...} 直接知覚 (pratyakṣa) も、自性を有するもの (sasvabhāva) であるな

(92) 拙稿[1].

(93) 拙稿『Kamalaśīla の *Sarvadharmanīḥsvabhāvasiddhi* (SDNS) 解説』(仏教文化研究, 1988).

(101) 以下 Māl と Tāl との同定し得る部分も挙げておく。Māl. P144a⁸-b¹, D134a⁷-b¹ = Tāl D258a²⁻³.

(101 a) ⇒ (9), (10).

(102) Māl. P. 144b¹⁻², D134b¹⁻².

(102 a) ⇒ (12)-(15).

(102 b) ⇒ (17)-(18).

(103) Māl. P144b²⁻³, D134b².

ら、そのとき、一切法無自性 (sarvadharmāṇiḥsvabhāva) という主張命題 (pratijñā) は崩れるであろう。もし、そ〔の直接知覚〕が、無自性であるなら、どうして、そ〔の直接知覚〕によって、あらゆる事物が空寂 (vivikta) ^(103 a) …103) であると知られようか。

[Ob-4] ^{(104…} また(A)なるもの (artha) を欠いている場所等のあるもの(B)を〔直接知覚によって〕把握するなら、それ(B)とは別なもの(A)を欠いていること (śūnyatā) [(A)として空であること] が、直接知覚によって知られるなら、一切法無自性と提唱する者達 (中観派) にとっては、何らかのものを直接知覚として認識することによって、一切法空寂と知るのであるうか、一切法 (sarvadharmā) には、自性を欠いた事物 (vastu) というものは何ら存在しない。それ (直接知覚によって把握されるもの) も、一切法の中に含まれるからである。もし〔直接知覚によって把握されるものが一切法の〕中に含まれないなら、自己〔中観派〕の主張は崩れてしまおう。 ^{…104)}

[Ob-5] ^{(105…} これ (一切法無自性) は、一切智者 (sarvajña) 等の、ヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) によって、正しく知られるのである、という〔中観派の見解〕も諸の賢者の満されるところではない。それ ^(105 a) (一切法無自性は、ヨーギンの直接知覚によって知られるということ) には、論理性 (yukti) がないからである。

もし、ヨーギンのその知 (jñāna) も、無なるものであるなら、その場合、それ (ヨーギンの知) が、どうして確実な認識 (pramāṇa) であろうか。

もし〔ヨーギンの直接知覚が〕実在であるなら、そのとき、〔中観派の〕主張 (pratijñā) ^{…105)} は崩れよう。

Māl 後主張 [P183a¹–186b⁸, D168a¹–171a²]

[Answer (An): 一切法無自性は直接知覚 (pratyakṣa) によって証明され得

(103 a) ⇒ (20)–(24).

(104) Māl. P144b^{3–5}, D134b^{3–4} = Tāl D258a^{8–4}, (31), (32), (33), (33b), (35), (204).

(105) Māl. P144b^{5–6}, D134b^{4–6}.

(105 a) cf. SDV ad SDK 37 D14a^{4–5}.

諸事物は、無自性であっても、顕現するがままのものを、実としての生起等を欠いていて、依存して生起するあらゆる形象を有した全ての事物として一時に直接知覚として熟知する故、一切智者 (sarvajña) と言われる。

る]

[An-1] ^(201...)「一切法無自性は」論理 (nyāya) によっても「証明され」得ない。というのは、まず、直接知覚 (pratyakṣa) によって、あらゆる事物 (vastu) が、空寂 (vivikta) であると知られないであろう。それ (直接知覚) の領域 (tadviśaya) とするところは、^(201 a) 実在物 (vastu) だからである。<=[Ob-1]> と「汝が」述べたことに関しても答弁しなくてはならない。仮に、[1] あらゆる人々の直接知覚[A]が、一切法無我を理解[B]し得ない[AにBが存在しない]というのか、あるいは、[2] 汝 (Dharmakīrti) の如き、無知という不透明な眼病 (timira) の薄皮によって智慧 (prajñā) の眼が働かない者達の直接知覚であるのか。そのうち、まず、[1] 第一の主張は、確実な検証方法 (pramāṇa) がないから、不合理である。その場合、あらゆる人々の直接知覚が「一切法無我を」理解しないと確定するには、いかなるブラマーンもない。「汝が」自己の認識を否定するだけでは、迷乱 (bhrānti) だからである。[[A]に[B]が存在しない。というのは。] 知覚の条件が得られていても、知覚されない [=NB 2・13] ^(201 b) ということが、それ (あらゆる人々の直接知覚[A]には一切法無我の理解[B]が、存在しないということを証明するのなら、どちらして、私によって、認識されない故、それ (一切法無我の理解[B]) がそこ (あらゆる人々の直接知覚[A]) に存在しはしないと、知られようか。あらゆる人々の心相続 (saṃtāna) に存在する心の活動は、凡夫 (arvāgdrś) ^(201 b) である汝 (Dharmakīrti) の認識の条件 (upalabdhi-lakṣaṇa) ではない。他人の認識を否定することも、不確定 (anaikāntika) であるからである。それ故に、思慮深い人 (prekṣavat) による、直接知覚によって、それ (一切法無自性) は、理解されないとのこの論述は、不合理である。[2] 第二の主張通りであれば、その場合「わかりきったことを再び証明すること (siddhasādhana) に他ならない。我々 (中観派) も、凡夫 (arvāgdrś) 達によって、そのような法の深遠な真実が、直接知覚として知られるとは認

(201) Māl. P183a¹-b⁷, D168a¹-b⁵. = Tāl. D258b³-⁴.

(201 a) ⇒ (101).

(201 b) ⇒ (33).

めない。けれども、汝 (Dharmakīrti) の如く、そのような真実 (tattva) を知ることはないにしても、勝れていて、多くのカルパに、無量の福德 (puṇya) と智 (jñāna) の資糧を集積することによって、あらゆる繁栄を生起する方便 (upāya) を獲得して、真実の意味を修習すること (bhūtartha-bhāvanā) によって生起した真実智 (samyajjñāna) を現わすことによって、あらゆる障害 (āvaraṇa) の闇を排除している諸のヨーギンの直接知覚 (yogi-pratyakṣa) ^(201c) によって、一切法無我と知るのである、ということが、どうしてあり得ないであろうか。このことに関して、論理性 (nyāya) が、^(201d) 後に示されなければならない。

また、直接知覚 (pratyakṣa) の対象 (viṣaya) は実在物 (vastu) であるか ^(201e) らと論難することも成立しない。というのは、諸の凡夫達の直接知覚というもの、眼病者 (taimirika) の直接知覚のように、色 (rūpa) などの虚偽な (alika) 対象を有するものである故、真実な実在物の自性を対象とするものであることは不合理である。 ^(201f) さもなければ、全ての人が、真実 (tattva) を見ることになってしまおう。ブッダや菩薩という、偉大な諸のヨーギンの知 (jñāna) というものも実在物 (vastu) を対象とすると、^(201g) 証明されない。彼らによって、実なる実在物 (vastu) の自性は、何も見られないからである。『聖菩薩藏經』 ^(201h) に、

すなわち、それ故、一切法は、自性という点で無であり、滅することなく、自性という点で寂靜であり、全く生起せず、起こることなく、発生せず、般涅槃 (parinirvāṇa) であるとも見られ、したがって、ある人によって

(201 c) ⇒ (60).

(201 d) ⇒ (205), (205e), (205f).

(201 e) ⇒ (101a).

(201 f) cf. PV 現量 (293)-(300). 戸崎(出) pp. 387-393.

(201 g) ⇒ (58).

(201 h) 大正. Vol. 11. No. 310. 大宝積經, 菩薩藏会 p. 297c²⁰⁻²⁹.

観一切法自性息滅。若如是観。名如理観。若観諸法自性寂靜。是則名為如理正観。若観諸法畢竟空寂。是則名為如理正観。若観諸法入平等性。是則名為如理正観。若観諸法畢竟無生。是則名為如理正観。若観諸法畢竟不生。是則名為如理正観。若観諸法畢竟不起。是則名為如理正観。若観諸法畢竟寂滅。是則名為如理正観。舍利子。是菩薩摩訶作是観時。亦不見有能観之者。應如是観。

見られるものも見られず、知覚されない。これが実なる見解であり、ありのままに見ること (yathādarśana) である。

[反論] また、一切法をありのままに見るとは、どういうことであるか。

[答論] 何も、見ないことである、と説かれるように。

『聖法集経』⁽²⁰¹⁾にも、「一切法を見ないことが、勝れた見方である」と説かれる。
(⇒ BhKI 212.17a3-4, tathā cokaṭṭhāraṃ sūtre / kathaṃ paramārtha-darśanam / sarvadharmāṇāṃ adharśanam iti /)

それ故に、直接知覚 (pratyakṣa) の領域とするところは、真実なる実在物 (vastu) であるということは、成立しない。^{...201)}

[An-2] さらにまた、非実在物 (avastu) は、なんとしても、知 (vijñāna) を生起せしめるということは妥当しないから <=[Ob-2]>^(202 a) と論難することも、不合理である。我々 (中観派) も、兎の角等のような非実在物 (avastu) が、また直接知覚 (pratyakṣa) としての知 (jñāna) を生起するとは認めない。けれども、一切法 (sarvadharmā) を陽炎 (marīci) や山びこ (pratiśrutkā) のようなものであると、あるがままに (yathābhūtam) 修習している諸の偉大なヨーガ行者達は、真実の対象を修習している場合の最高の極みから生起した (bhūtārthabhāvanāprakarṣaparyantaṃ)^(202 b) 三昧 (samādhi) を獲得しているから、最も勝れた不可思議な力 (acintyaśakti) を具えている故、それ等のヨーガ行者には、その (三昧による不可思議な力) によって、まさしく直接知覚として一切法無我を理解し得る、つまり、一切法無我の真実 (tattva)

(201 i) 大正 Vol. 17. No. 761. 仏説法集経 p. 637b²¹.

名為不見。世尊。是名正見諸法。

BLO GSAL GRUB MTHA' par Katsumi Mimaki, Zinbun Kagaku Kenkyusyo. Université de Kyoto (1982). 112a2.

拙稿、『中観光明論』と『ロサル宗義書』(仏教論叢第32号, 1988) p. 75b.

The Prajñāpradīpa of Bhāvaviveka D. No. 3853. 247b³, SDV. D4b¹⁻², 4b⁶⁻⁷. MAV. p. 286¹⁵⁻¹⁶.

(202) Māl. P183b⁷-184a⁴, D168b⁵-169a¹. = Tāl D258b⁴⁻⁶.

拙稿『後期中観派とダルマキールティ (1)——縁起を巡る論争: Pratityasamutpādaheṭu——』(仏教大学人文学論集第23号, 1989. Dec.) fn (11) [II-a].

(202 a) ⇒ (102).

(202 b) NB 1·11. ⇒ (63). cf. Māl. P248b¹, D223b⁷. Y. Kajiyama 前掲書 (33c), p [240] fn 119.

を極めて明瞭に直観するそういった知 (jñāna) が、生起する。〔法集經に〕
 「真実とは見ないこと (adarśanam)^(202 c)である」とあるが、絶対否定 (prasajya
 pratiṣedha)^(202 d)ではないのである。^{...202)}

[An-3] さらにまた、その直接知覚 (pratyakṣa) も、自性を有するもの (sas-
 vabhāva) であるなら、云々 [一切法無自性という主張命題は崩れよう。]
 <=[Ob-3]>^(203 a) というその〔論難〕に対しても〔次のように答えよう。〕一切
 法 (sarvadharma) は、勝義として、不生 (anutpanna) である、という
 ことと、全く同じく直接知覚も、勝義としては (paramārthatas), 無自性
 (niḥsvabhāva) なのであるが、しかしながら、直接知覚等の世俗の真実
 (saṃvṛtisatya) に依存しているあらゆる設定 (vyavasthāpana) には、全く
 混乱はない。諸の中観派は、一切法が、勝義として、無自性であるとしても
 (= BhK 218, 21b6 sarvadharmāṇām paramārthato niḥsvabhāvatve'pi),
 どうして、あらゆる世間的約束事 (vyavahāra) を断ち切ろうか。世間的約
 束事という見地からは、ヨーガ行者の知や他の凡夫の知や聖なる人等を設定
 する根拠を認めないのではない。^(203 b) (= BhK I[218] 21b6, na hi sarvadharmā-
 ṇām paramārthato niḥsvabhāvatve'pi saṃvṛtyā yogijñānam anyad vā
 pṛthagjñānam neṣṭam)

けれども、あらゆる場合に、世俗としても、因 (kāraṇa) のないものは、
 世俗としても、生起しない。例えば、兎の角等のように。〔世俗として、因
 の〕存在するものは、勝義としては、無自性〔虚偽〕ではあっても、生起す
 る。例えば、幻や映像等のように。この幻等は、〔世俗としては〕縁って
 生起するもの (pratītyasamutpāda) であっても、〔勝義としては〕実在性

(202 c) ⇒ (201j).

(202 d) Śāntarakṣita は、ここでの Kamalaśīla の見解とは異なり、SDP. D18b⁷ で
 「見ないというのは絶対否定 (prasajyapratīṣedha) である」と述べている。

(203) Māl. P184a⁴-185a⁴, D169a¹-b⁶. = Tāl D258b⁶-259a³.

拙稿 <cf. (202)> fn (11) [II-b] [II-c].

以下の特に BhK. と一致する部分は、同じく Kamalaśīla の *Ālyāvikalpapraveśadhā-
 raṇi-ṭīkā*, (聖入無分別陀羅尼広釈) P. No. 5501. 166a³-b². と一致する。

cf. *Āryaśālistambaka-ṭīkā* (聖稻芋經広釈) P. No. 5502. 184b⁷⁻⁸.

(203 a) ⇒ (103).

(203 b) ⇒ (65).

(vastutva) のものになってしまうのではない。世間の常識 (prasiddha) や
 確実な検証 (pramāṇa) によって、拒斥されるからである。(=BhK I [218]
 -[219] 22a1-3, kiṃ tu yasya saṃvṛtyāpi kāraṇaṃ nāsti sa saṃvṛtyāpi
 notpadyate / yathā śaśaviṣāṇādi / yasya tu vidyate sa paramārthato'liko'pi
 samutpadyata eva / yathā māyāpratibimbādi / na ca māyādeḥ saṃvṛtyā
 pratītyasamutpāde paramārthato vastutvaprasaṅgaḥ / tasya vicārākṣa-
matvāt / ataḥ sarvam eva māyopamaṃ jagat /)

それと同様に、一切法は、〔世俗としては、因と縁に〕縁って生起するもの
 の (pratītyasamutpāda) ではあっても、〔勝義としては〕実在性のものとな
 ってしまうのではない。確実な検証 (pramāṇa) によって拒斥されるからで
 ある。その場合、ちょうど呪文 (mantra) や薬等によって象 (hasti) 等の多
 様な幻が生起するのと同様に、諸の衆生の業 (karman) と煩惱 (kleśa) [と
 いう幻] によって生起等〔の幻〕も、起こってくる。〔それと同様に〕諸のヨ
 ーギンの自己の福德と智の資糧〔の幻〕によって、ヨーギンの知等の幻も、
 まさしく生起する。(=BhK I [219] 22a3-4, tatra yathā kleśakarmamā-
 yāvaśāt sattvānām janmamāyā pravartate, tathā yoginām api puṇyājñā-
 nasambhāramāyāvaśāt yogijñānamāyā pravartata eva //)

種々な縁 (pratyaya) によって、その幻も、種々に顕現するからである。
 (203 c ...
 『聖般若経』にも、次のように説かれている。

あるものは、声聞によって、〔あるものは、独覚によって〕あるものは、
 菩薩によって、あるものは、如来によって、あるものは、煩惱によって、あ
 るものは、業によって、化作されたものである。スプーティよ、このように

(203 b *) = AAPV. p. 972¹³⁻¹⁴ ata eva saṃvṛtyā kāraṇavaikalyāc chaśaviṣāṇādī-
 nam anutpattiḥ

(203 c) Serie Orientale Roma XLVI, The Gilgit Manuscript of the Aṣṭādaśasā-
 hasrikāprajñāpāramitā ed. by E. Conze. ch. 82. pp. 135²²-136².

Bhagavān āha: yat punaḥ Subhūte sarvadharmā nirmītā, tatra kaścic chrāvaka
 nirmītaḥ kaścit pratyekabuddha nirmītaḥ kaścīd bodhisattva nirmītaḥ kaścit
 Tathagatā nirmītaḥ kaścit kleśa nirmītaḥ kaścit karma nirmītaḥ, anena Subhūte
 paryāyeṇa sarvadharmā nirmītopamā.

摩訶般若波羅蜜經，大正 Vol. 8. No. 223. 如化品第87. 415c²³⁻²⁸.

一切法皆是化。於=是法中-有=声聞法變化-。有=諸仏法變化-。有=煩惱法變化-。有=

して、あらゆるもの (sarvadharmā) は、化作され生起したものである。^{...203 c)}

^{(203 d)...} 次のことが、 ヨーギン達と凡夫達の違い (vśeṣa) である。なぜなら、彼ら (ヨーギン達) は、幻術師のように、その幻をありのままに熟知しているから、^{...203 d)} 真実として、執着することはない。(=BhK I [219] 22a4-22b1, ^{(203 c)...} tathā cōktam āryaprajñāpāramitāyām / “kaścīt śrāvakanirmītaḥ / kaścīt pratyekabuddhanirmītaḥ / kaścīt bodhisattvanirmītaḥ / kaścīt tathāgatanirmītaḥ / kaścīt kleśanirmītaḥ / kaścīt karmanirmītaḥ / anena, śubhūte, paryāyeṇa sarvadharmā nirmītotpannaḥ”^{...203 c)} / ^{(203 d)...} iti / ayaṁ tu viśeṣo yogināṁ pṛthagjanebhyaḥ / te hi māyākāravat tāṁ māyāṁ yathāvat pariññānāt satyato nābhiniśante / tena te yogina ucyante /^{...203 d)})

同様に『聖法集經』^(203 e)にも、次のように説かれる。

ちょうど、ある幻術師が、化作されたものを解き放なそうと努力している。彼 (幻術師) は、それ (化作されたもの) を以前から知っている故、彼は、化作されたものに対して執着しない。それと同様に、悟りを獲得した人は、三界は、化作されたものに等しいと知っていて、衆生 (jagat) を先に知っており、衆生のために、鎧う。(=BhK I [219] 22b2-3, tathā cōktam āryadharmaśāṅgītau / “māyākāro yathā kaścīn nirmītaṁ mokṣaṁ udyataḥ / na cāsya nirmīte saṅgo jñātapūrvō yato'sya saḥ // tribhavaṁ nirmītaprakhyāṁ jñātvā saṁbodhipāragaḥ / saṁnahyate jagaddhetor jñātapūrvāṁ jagat tathā” // iti /)

^{(203 f)...} 見物人のように、それ等生起等の幻を顕現するがまま (yathādarśanam) が真実 (satya) であると執着している凡夫達は、顛倒し執着する故に、凡夫達と言われる。それ故、世俗 (saṁvṛti) として、修行 (yoga) を伴ったヨ

業因縁法变化-。以-是因縁-故。須菩提。一切法皆是变化。

(203 d) = AAPV. p. 641¹⁸⁻¹⁶, ⇒ (83).

(203 e) 吉村修基著『インド大乘仏教思想研究』(1974) p. 357. (95).

法集經, 大正 Vol. 17. 627b¹⁹⁻²².

如世間幻師	発心度幻人
彼幻不著幻	以未曾有故
知三界如幻	発大菩提心
為度諸衆生	実知彼衆生

ーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) は存在するから、兎の角の等のように絶対無 (atyantābhāva) ではない。それ故、直接知覚 (pratyakṣa) によって、あらゆるもの (dharma) は、無我 (anātman) であるとの理解があるから [一切法無自性と直接知覚には] 対立はない (aviruddha)。ヨーギンも、勝義としては、無自性ではあっても、凡夫等のように世間的習慣 (vyavahāra) の上からは、確定される。^{...203 f)} (⇒ BhK I [219] 22b1, ye tām bālaprthagjanavat kautūhalaṁ satyatvenābhiniṣṭās te viparītābhiniveśād bālā ucyanta iti sarvam aviruddham /)

『聖二諦説示』^(203 g) に、「勝義としては、不生 (絶対無) であっても、世俗としては、道を修習する」と説かれるように。^{...203)} (= BhK I [218] 21b6-22a1, tathā cōktam āryasatyadvayanirdeśe / “paramārthato’ tyantābhāvaś ca sarīvṛtyā ca mārgaṁ bhāvayati” iti /)

[An-4]^(204...) また、(A)なるものを欠いている場所等のあるもの(B)を、直接知覚によって把握して、それ(B)とは別なるもの(A)を欠いていること (空, śūnya(-tā)) が、直接知覚 (pratyakṣa) によって知られよう云々とのその詰問 <=[Ob-^(204 a) 4]> も、不合理である。その理屈立ては、彼々空性 (itaretarāśūnyatā) であるが、相空性 (lakṣaṇaśūnyatā) ではない。相空性によって、勝義として、一切法無自性 (sarvadharmāṇiṣvabhāva)^(204 b) であると承認される。勝義として、それら (一切法) には、個別と一般相 (sva-, sāmānya-lakṣaṇa) が、確定されたままには存在しないからである。諸事物にとって、彼々空性であることは、勝義ではないが、^(204 c) しかし世間的習慣 (vyavahāra) 上の真理に依存しては根拠のあるものである。というのは、あらゆる事物は、勝義として、不生である。一なるものであるから無区別ではないけれども、かえって、諸の凡

(203 f) ⇒ (84).

(203 g) P. Vol. 34, No. 846. Āryasārīvṛtiparamārthasatyānirdeśanāmamahāyānasūtra. 260a¹⁻⁵.

清浄毘尼方広経, ㊦ Vol. 24, No. 1489. p. 1076b¹²-c¹⁰, 寂調音所問経, 同, No. 1490. pp. 1081c²⁵-1082a²⁸

(204) Māl P185a⁴-b⁵, D169b⁶-170a⁵. = Tāl D259a³⁻⁶

(204 a) ⇒ (104), (33b).

(204 b) ⇒ (30), (33g).

夫にとっては、夢などの状態の如くに相互に区別されて顕現する。それ故、
 それ(彼々空性)にあっては、世間の常識 (prasiddha)を本性としており、
 彼ら(諸の凡夫)にとっては、Aを欠いているBを〔直接知覚によって〕把
 握することによって、この彼々空性が確立されるが、勝義としてではない。^(204d)
 真実としては、夢や幻の如き諸事物に、相互に区別のある自性は存在しない。
 まさしくそれ故に、世尊によって、この(彼々空性)は、勝義に基づい
 ているのではない故、最も劣ったものであるから、否定されなくてはならな
 いと、説かれた。『楞伽經』に、「すなわち、マハーマティよ、この彼々空
 性は、最も少ったものである故、それは、汝によって断たれなくてはならな
 い」と説かれるように。

^(204e)
 一切法の相空性とは、一切法の無顕現な (nirābhāsa) 知 (jñāna) を生起
 することによって知られる。なぜなら、それら(一切法)の個別と一般相
 (sva-, sāmānyalakṣaṇa) が、確定されたままに、知覚の条件を得ていても
 (upalabdhi lakṣaṇaprāptasya), 諸のヨーギンは、勝義の形象 (ākāra) を知
 覚しないから^(204g) (anupalabdher), 一切法の無顕現な知を生起することによ
 って、知識を確定するのである。

それ故に、最も劣ったものである彼々空性 (itaretarāśūnyatā) は、童子
 (kumāra) によって、遍計されたもの (parikalpita) に依存して言われるけ
 れども、それは、〔勝義的な空性とは〕必然関係のないものである。^{...204f)...204g)}
^(205...)
 [An-5] また、それ(一切法無自性)は、ヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa)

(204c) ⇒ (30), (31), (33f).

(204d) ⇒ (30), (31), (33f).

(204e) LAS. p. 75¹⁸⁻¹⁹.

eṣā ca mahāmate itaretarāśūnyatā sarvajaghanyā sā ca tvayā parivarjayitavyā //

大正 Vol. 16. No. 672. 大乘入楞伽經 p. 599a¹⁴⁻¹⁵.

大慧。此彼彼空空中最麤。汝應遠離。

MAT. p. 160¹⁷⁻²⁰. ⇒ (54).

(204f) ⇒ (32)-(38), (79). cf. BhKI [211] ll. 1-2.

(204g) cf. LAS. p. 74⁹⁻¹⁰.

tatra mahāmate lakṣaṇaśūnyatā katamā yaduta svasāmānyalakṣaṇaśūnyāḥ
 sarvabhāvāḥ

NB 2.13 ⇒ (33).

(205) Māl P185b⁵-186b³, D170a⁵-171a². = Tāl D259a⁶-b¹.

によって、正しく知られこそする、という〔中観派の〕言明も、諸の賢者を満足させるものではない。それ（一切法無自性は、ヨーギンの直接知覚によって知られるということ）には、論理性（yukti）がないからである、とのその詰問＜^(205 a)〔Ob-5〕＞も、不合理である。この〔中観派の主張〕には論理性があるからである。というのは、諸の賢者〔Dharmakīrti 等〕は直接知覚は、概念知を離れ、迷乱なきこと（pratyakṣaṁ kalpanāpoḍham abhrāntam）^(205 b)と直接知覚の特性を解説する。修習（bhāvanā）によっても対象（artha）が存在しない場合ですらも、極めて明瞭な知（jñāna）が生起する。例えば、欲望、悲しみ、恐怖、狂気等によって汚された人々が、何度も何度もくり返し行なった修習によって、女人等を極めて明瞭に顕現（sphuṭābhāsa）する知を生起するように。彼等（欲求等によって汚された人々）によって、それら（女人等）が眼前に存在しているかのように見られた直後に、身体等の多なる形象を有した動きが開始されるように。^{...205 c)}

それ故に、述べられた通りの真理を瞑想しているある人も、そこに非常に明瞭な知が生起するということがあり得る。非常に明瞭に顕現する知は、常住ではない。灯火の如く、分別の風によって乱された身体に、明瞭な形象はあり得ないからである。

ある者によって、何であれ、常に熱心に思い続けられた事柄は、それらから、修習の結果、つまり究極から生起した結果である明瞭な知が知覚されよう。^(205 d)例えば、欲望等によって汚された人々によって、女人などが、立ち現われてくるように。（必然性）

ある者によっても、長い間、常に精神を集中して、一切法が無我であると修

(205 a) ⇒ (105).

(205 b) ⇒ (70). NB I-4, PVin. p. 40². TS(1213)a.

(205 c) cf. PV 現量 (281), (282). ⇒ (71)-(73).

cf. TSP. p. 493²⁴⁻²⁵ tathā hi—abhūtam api bhāwayatām kāmāśokabhayādyupap-lutacetāsāmanapekṣitasādharmyādismṛter abhyāsasya sphuṭapratibhāsasya jñāno-tpādanasāmarthyam upalabhyata eva /

(205 d) cf. (202b) (63) NB 1-11.

(205 e) PV 現量 (284) (285) 戸崎(上) pp. 379-380.

(205 f) cf. The Sarvajñasiddhi of Ratnakīrti. p. 1²⁰, Tib, skt. Works Series, Vol. III,

習されている。(所属性)

〔一切法無我を修習している人には、修習の結果である明瞭な知が知覚される。^(205 e) (結論)〕

〔これは〕同一性の能証 (svabhāvahe^(205 f)tu) 〔に基づく推論〕である。

その場合にも、プラマーナを具えている対象を有する〔知〕は、整合している (avisamvādaka)。例えば、世間的約束事 (vyavahāra) として、煙等の確定した立証因 (liṅga) から起った火等の知のように。(必然性)

ヨーギン達の無我の知、それもプラマーナを具えた対象を有するものである。(所属性)

〔ヨーギン達の無我の知は、整合している。^(205 g) (結論)〕

〔これは〕同一性の能証 〔に基づく推論〕である。

これ (ヨーギン達の無我の知) が、プラマーナを具えていることが、次に論じられる。

あるものに関して、明瞭に顕現 (sphuṭābhāsa) し、整合して (avisamvādaka) 生起しているあるものは、そのものに対する直接知覚 (pratyakṣa) としてのプラマーナである。例えば、世間的約束事 (vyavahāra) として、色 (rūpa) 等に対する眼等が損なわれていない人の眼識 (cakṣurvijñāna) 等のように。(必然性)

一切法無我を〔瞑想の〕対象としているヨーギン達の知も、明瞭であって、整合している。(所属性)

〔一切法無我を瞑想しているヨーギン達の知は、直接知覚としてのプラマーナである。^(205 h) (結論)〕

yo yaḥ sādaranirantaradīrghakālābhyāśasahitacetogūṇaḥ sa sarvaḥ sphuṭībhā-vayogyah / yathā yuvatyākāraḥ kāmīnaḥ puruṣasya / yathoktābhyāśasahita-cetocetogūṇāś cāmī caturāryasatyaviśayā ākāra itī svabhāvo hetuḥ /

Y. KAJIYAMA, Studis in Buddhist Philosophy, p[323] fn (368).

川崎信定, 前掲論文 <⇒ (91)> p. 324.

(205 g) cf. PV 現量 (286) ⇒ (86), (74), (75), (87a).

(205 h) cf. PV 現量 285 (286), 戸崎 (p. 380. ⇒ (74), (75), (86), (87a).

(205 e) — (205 h) の検討の結果、次のようにヨーギンの知が直接知覚であることが論証されている。

一切法無我を修習しているヨーギンの知 → 明瞭な知 (除分別 kalpanāpoḍham →

〔これは〕、同一性の能証〔に基づく推論〕である。そういうふうに、ヨーギン達による一切法無我の知が、論理 (yukti) によって証明される場合、どうして賢者達は、満されないであろうか。もし、そのヨーギンの知も、無のようなものなら云々と反論することに対しても、以前に答弁し終っている。^(205 i) あらゆる事物は、兎の角と同様に全く存在しないものであるとは述べはしないで、かえって〔世俗的には存在するが〕幻 (māyā) 等の如く、勝義としては、無である〔と述べる。〕したがって、あらゆる世間的約束事 (vyavahāra) が、否定されるのではない。すなわち我々 (中観派) は世間的約束事 (vyavahāra) も承認しないのではない。^{…205)} と述べるように。

〔以上が直接知覚 (pratyakṣa) によって一切法無自性が知られ得ることの証明である〕

〈1989年10月30日提出〉

整合している (無迷乱 abhrāntam) → 直接知覚 [cf. 本稿初]. なお, Kamalaśīla は Vinītadeva のように、無迷乱 (abhrānta) を整合性 (avisamvāditva) と理解している。cf. TSP p. 479²⁰–480⁹
 (205 i) ⇒ (203).